

4. モモノゴマダラノメイガ若齢幼虫に対する各種殺虫剤のモモ果実での残効性 (情報)			
[要約] モモ果実での残効期間は、スピノエースフロアブルが 44 日と最も長く、次いで、ダ ーズバン水和剤 25、オリオン水和剤 40、バリアード顆粒水和剤が 31 日、スミチオン 乳剤 40、ロディー乳剤が 21 日である。一方、スプラサイド水和剤、モスピラン水溶 剤が 10 日、デナポン水和剤 50 は 3 日と短い。			
研究室名	病虫研究室	連絡先	086-955-0543

## [背景・ねらい]

モモで減農薬栽培を推進するため、難防除害虫であるモモノゴマダラノメイガに対して殺虫剤 10 剤のモモ果実での残効期間を知り、殺虫剤散布回数の削減のための資料とする。

## [成果の概要・特徴]

1. 幼虫による果実への食入は、スピノエースフロアブルで散布 44 日後まで認められず、次いで、ダーズバン水和剤 25、オリオン水和剤 40、ロディー乳剤で散布 21 日後まで認められなかった。一方、スプラサイド水和剤、デナポン水和剤 50、モスピラン水溶剤では果実への食入が散布 7 日後以降認められた（表 1）。
2. 果実食入数の対照比 20%以下の散布後日数までを残効期間とすると、スピノエースフロアブルの残効期間が 44 日と最も長く、次いで、ダーズバン水和剤 25、オリオン水和剤 40、バリアード顆粒水和剤が 31 日、スミチオン乳剤 40、ロディー乳剤が 21 日であった。一方、スプラサイド水和剤、モスピラン水溶剤が 10 日、デナポン水和剤 50 が 3 日と短かった（表 1、2）。

## [成果の活用面・留意点]

1. 本試験は、殺虫剤散布から 31 日後までの降水量が平年の 4.4%と極めて少なく、殺虫剤の残効に対する降雨の影響が極めて少ない条件下で行われたものである。
2. 本試験は、無袋栽培のモモ果実（品種：白桃）で行った。
3. 供試薬剤の内、スプラサイド水和剤はモモノゴマダラノメイガに、他の 9 剤はシンクイムシ類（モモノゴマダラノメイガ、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガなど）に対して登録がある。

[具体的データ]

表1 各種殺虫剤の残効性

薬剤散布日	薬剤名	希釈倍数	1果当たり食入数の対照比 <sup>z</sup>		
			散布3日後	散布7日後	散布10日後
5/23	スミチオン水和剤 40	800	0	0	0
	スプラサイド水和剤	1,500	0	2	18
	ダズバン水和剤 25	1,000	0	0	0
	デナボン水和剤 50	800	0	23	24
	オリオン水和剤 40	1,000	0	0	0
	モスピラン水溶剤	2,000	0	3	6
	新グラミン(対照) <sup>y</sup>	5,000	100	100	100
5/24	ロディー乳剤	1,000	0	0	0
	バリアード顆粒水和剤	2,000	0	14	3
	スタークル顆粒水溶剤	2,000	0	29	0
	スピノエースフロアブル	2,000	0	0	0
	新グラミン(対照) <sup>y</sup>	5,000	100	100	100

(続き)

薬剤名	1果当たり食入数の対照比 <sup>z</sup>			
	散布14日後	散布21日後	散布31日後	散布44日後
スミチオン水和剤 40	0	2	21	—
スプラサイド水和剤	35	53	114	—
ダズバン水和剤 25	0	0	3	—
デナボン水和剤 50	30	58	66	—
オリオン水和剤 40	0	0	7	—
モスピラン水溶剤	42	7	23	—
新グラミン(対照) <sup>y</sup>	100	100	100	—
ロディー乳剤	0	0	24	—
バリアード顆粒水和剤	0	0	5	41
スタークル顆粒水溶剤	7	54	86	—
スピノエースフロアブル	0	0	0	0
新グラミン(対照) <sup>y</sup>	100	100	100	100

<sup>z</sup>対照(新グラミン)の果実食入数に対する比率(%)。 <sup>y</sup>展着剤

表2 種殺虫剤の残効期間(まとめ)

残効期間 <sup>z</sup>	薬剤名
44日	スピノエースフロアブル
31日	ダズバン水和剤 25、オリオン水和剤 40、バリアード顆粒水和剤
21日	スミチオン乳剤 40、ロディー乳剤
10日	スプラサイド水和剤、モスピラン水溶剤
3日	デナボン水和剤 50
3~14日	スタークル顆粒水溶剤

<sup>z</sup>果実食入数の対照比が20%以下の散布後日数までを残効期間とした

[その他]

試験研究課題・事業名：フェロモントラップを利用したモモノゴマダラノメイガの効率的防除法の開発

予算区分：交付金(病害虫防除農薬環境リスク低減技術確立事業)

研究期間：平成16~18年度